東北学院大学教育学科論集　第 3 号 ― pp. 67-73　2021

教育学科学生の教育および大学生活に関する意識調査

A Report of University Students in Department of Education

高橋　千枝，稲垣　　忠，加藤　　卓，佐藤　正寿，長島　康雄
TAKAHASHI Chie, INAGAKI Tadashi, KATO Takashi,
SATO Masatoshi, NAGASHIMA Yasuo

キーワード：教育学科，教育，大学生活，インタビュー調査
Key words : department of education, education, campus life, interview

1.　問題と目的

本研究では，本学教育学科学生の教育と大学生活に関する意識について調査し，本学教育学科が求められていること，また本学の教育学科が育成すべき人材について検討する。2018 年（平成 30 年）4 月より文学部教育学科が開設された。教育学科は卒業までに教育職員免許状（以下教員免許状）を取得することが必修ではないものの，現代社会に対応できる，時代が求める教員を養成するために開設されたと言っても過言ではない。このような考えのもとに開設された文学部教育学科の特徴としては以下の 5 点があげられる。第一に 3 種類の教員免許状が取得できることである。これは「義務教育学校」（学校教育法，2019）にみられるような小中一貫教育や「中等教育学校」（学校教育法，2019）のような中高一貫教育の拡大に対応するために，本学科では小学校，中学校（英語）･高等学校（英語）の 3 種類の教員免許状を取得できる。第二には専門性が高く且つ即戦力となる教員を育成することである。現代社会において子ども達は多様な生活環境で育っている。また現代社会の持つ問題や課題に対応しきれず個別の支援を必要とする児童・生徒も多い。そのような個性ある児童・生徒に対応するために，本学科では学習指導・生徒指導の両面にわたり実践的な指導力を身につけた教員を育てることが第二の特徴である。第三の特徴は外国語に対応できる小学校教員を養成することである。2020 年度（令和 2 年度）から開始された小学校での外国語活動および外国語に合わせて，本学科では外国語（英語）を含む小学校全教科・領域を，自信を持って教えることができる小学校教員を養成することに特徴がある。第四は安全・防災教育などの地域の課題，ICT の活用や，「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の導入など，現代の教育課題に対応できる多面的・

東北学院大学

多角的な指導力持った教員を養成することである。さらに第五の特徴として 1 学年 50 名という少人数制の中で教育をすることも本学科の特徴である。

以上のような特徴を踏まえた上で，さらに本学科では学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を定めている。まず（1）教育学における基本的知識や固有の思考方法について，その概要を説明することができること。そして（2）人がよりよく生きるための学びと人間的成長を支援することができること。(3）多面的な実践的指導力を身につけ，多様な児童生徒の一人ひとりに寄り添うことができること。(4）幅広い異文化理解・国際理解に基づいて，小学校での英語教育に力を発揮することができること。最後に（5）複数の学校種において，多様な発達段階の児童生徒の学びと成長を支援することができること。本学科は学生にこれらのことを卒業するまでに習得するよう求めている。

このように本学科では専門性の高さに加え多様な視点を持った教師を養成することを目的としている。一方で当然のことながら入学した学生も多様な目的・意図を持って入学し本学科で学び始めている。開放制の教員養成大学では教員免許状を取得したいという学生であってもその目的は様々で，卒業後に教師になりたいと思っている学生ばかりではないことも明らかとなっている（大谷・柿内，2013)。そこで本研究では教育学科の 1 年次生に調査を実施し，学生の本学科での学びに対する意識，また教師や教育に対する意識や入学するまでに教育とどのような接点を持ち関係を築いてきているのか等を調査し，今後の本学科のあるべき姿について検討してみたい。

2.　方法

1）　調査協力者

2018 年度教育学科 1 年次生 48 名（男性 19 名，女性 29 名）

2）　手続き

(1）　インタビューデータの収集

学生にインタビューを実施した。インタビューデータは, 1 年生の必修科目である「研究・発表の技法」（6 クラス）の時間内に設定されたインタビューを学ぶ授業回で実施し収集した。学生はあらかじめ用意された質問項目を二人組になり互いにインタビューをする形式をとった。インタビュー内容は記録用紙への筆記記録と録音記録によって保存された。インタビュー時間は 1 人 15 分から 30 分程度であった。インタビューデータの収集については授業内で教員が詳細に指導をしながら進めた。

(2) 質問項目

質問項目は大谷・柿内（2013）を参考に作成された。具体的内容は以下の通りである。まず（1）大学入学前までの学校生活が楽しかったかどうか,（2）大学生活は楽しいか,（3）大学の授業は楽しいか,（4）大学生活でやってみたいことはあるか,（5）教師になりたいか,（6）理想の教師像とはどのような人物か,（7）これまでに子どもと接する機会があったか,（8）その他自由回答の項目も設け，各クラスで質問項目を決定し，自由に質問させた。

(3) インタビューの分析方法

学生が実施したインタビュー記録を回収し，上記質問項目別に記録内容を分析した。分析は量的な分析に加え，KH Coder によるテキストマイニングを使用し，学生の語りの質的な分析も試みた。なお（8）の自由回答については今回の分析からは除外した。学生には自身のインタビュー内容が分析されること，ただし個人が特定されるような形での発表はしないことを約束し，データ提供の了承を得ている。

3. 結果と考察

1) 高校までの学校生活について

高校までの学校生活については「楽しかった」と答えている学生が 93.8% と，ほとんどの学生が楽しかった経験を持っていた。部活動（31.3%），体育祭・文化祭などの学校行事（35.4%），また仲間との関係（18.8%）等が楽しい充実した学生生活の要因になっているようである。教師になって部活動の顧問等になり児童・生徒を指導したいと語っている学生がいることからも，高校卒業までにポジティブな学校生活を送ることが将来の職業像に繋がっていくのかもしれない。本学科の学生が中高の学校生活で，楽しい思いを十分経験していることを高く評価する一方で，経験してこなかったかもしれない学業や対人関係において学校生活につまづき，困難を抱えている児童・生徒への支援を考えることについては，今後大学の授業を通して学生と検討する必要はあるのかもしれない。

2) 大学の授業について

大学の授業については「楽しい」と回答した学生は 37.5%,「楽しい授業もあり楽しくない授業もある」と回答した学生は 35.4% であった。楽しい理由としては「学びたいことを学んでいる」といった発言があることからも考えられるように「教師になりたい」「教育を学びたい」という思いのある学生にとって，本学科の実際の教育内容は満足できる内容であると考えられる。一方で 27.1% の学生が大学の授業は楽しくないと回答しており，

大学の授業に満足していない学生もいるようである。また上述したように，楽しいと感じている学生も授業の内容によっては満足感を得られていないものもあるようだ。ただし，学生が楽しくないと語っている授業および授業形態が即授業改善に値する授業かどうかについては慎重に検討する必要がある。というのも，今回のインタビューでは授業が楽しくないと思う理由に「先生の話を聞く授業」「苦手な科目」「難しい科目」というように，座学の授業形態やもともと苦手意識のある科目，また専門性の高い講義を受講する意味に疑問を持ったり，受講することに困難さを感じたりしている語りもあり，これは今後の大学での授業を重ねることによって解消されていくことも十分考えられるからである。

3）　理想の教師像や教育観について

今回のインタビューに回答した学生は，81.3% の学生が将来教師になることを希望していた。やはり本学科に入学した学生は教師を希望している学生が多いことが明らかとなった。教師になりたいと思った理由としては，小学校，中学校，高等学校のいずれかで尊敬できる教師に出会った，憧れる教師に出会ったと語った学生が 39.6%，子どもが好きと答えた学生が 10.4%，家族や親族に教師がいると語った学生が 8.3% であった。理想の教師像に関しては，「生徒」を使用した語りが多くみられ，「生徒を一番に考える」「生徒一人一人を気にかける」「生徒とともに一喜一憂できる」といったように，教授方法の良し悪しというよりも教師の人間性に焦点をあて理想の教師像を考えていることがわかった。また理想の教師像に，前述した「自身が出会った教師が理想」と語っている学生もおり，ここでも本学科学生は大学入学までにポジティブな経験，とりわけ教師との出会いにおけるポジティブな経験をしていることが示唆される。

4）　これまでに子どもと接触した機会について

これまでに子どもと接した機会については，83.3% の学生が「ある」と回答した。しかし，83.3% の学生のうち「学習塾等で定期的に子どもを教えている」「ボランティア等で定期的に子どもと会う機会がある」というように定期的に子どもと関わる機会を持っている学生は 31.3% にとどまった。子どもと接した機会は多くの学生にあるようだが，その頻度はあまり多くないようである。また塾等での定期的な接触はあるものの，学校や福祉施設等へ定期的に通い子どもと接触している学生は少ないようである。前述した教師になりたい理由や教師像からもわかるように，教師になりたい思いはこれまでの子どもとの経験からではなく，自身と自身の出会った教師との関係や経験からのほうが強いと考えられる。経験が全てではないことは言うまでもないが，本学科のカリキュラムを実行する上で

は，即戦力となる教師を養成するために，直接児童・生徒（乳幼児も含め）と接触する機会をより一層取り入れることを検討する必要があるのかもしれない。

5） 大学生活でやってみたいことについて

大学生活で何をしたいかという問いに対する上位回答を見てみると，順に「留学」が25%,「ボランティア活動」が 16.7%,「旅行」が 14.6%,「アルバイト」が 12.5%,「勉強」が 10.5% となった。本学科学生は国外に興味を示しているようである。令和 2 年度からは小学校にも外国語が導入される。国外にも興味を持っている学生が多いことは当学科としては大変心強く，また専門性の高い即戦力となる教師の養成にもつながると考える。

またボランティア活動や勉強と語った学生の中には，ボランティアや自主学習を通して児童・生徒ともっと関わりたいと語った学生もいる。子どもと接した機会が少ないのではないかということは前述した通りだが，学生自ら主体的に子ども達と接する機会を作りたいと考えていることは大変心強く，本学科としても授業内外で支援したいところである。

アルバイトをしたいと語った学生も一定数見られている。アルバイトをしている理由として小遣いのためと語っている学生もいたが，アルバイトを通して人間関係や社会のルール等を学んでいると考えている学生もおり，アルバイトは学生にとって単にお金を稼ぐだけの行為ではないことが考えられる。アルバイトとりわけ学外でのアルバイトは大学が関与できない活動ではあるが，学業との両立が可能な範囲であれば学生にとっては有益な活動になるのではないだろうか。

4. 総合考察

今回の調査では多くの学生が教師になりたいと語っていた。これは教育学科としては大変心強く，今後も本学科のプログラムを通してバックアップしていきたいと考える。学校訪問や事前学習等の様々な養成プログラムを経ることにより教員志望度が高まることも明らかとなっている（三島ら，2014）ことからも，今後の本学科のプログラムを履修することにより，さらに教師としての意識が深まると考えられる。しかしながら，本学科学生の現状は，実際の児童生徒と学校現場等で接している機会は決して多いとはいえないため，学科として実際の教育現場との協働によるプログラムづくり等もさらに検討していきたい。

本学科の学生は多くの学生が教師になりたいと思っている一方で 2 割弱の学生は教師を目指していないことも明らかとなった。白石（2016）は，教育学部や教育学科以外の学生が「教育学」を学ぶことにより，人として成長するための教育の重要性について認識を深

めていることを明らかにしており，教育を学ぶことは将来教員を志望している学生に限らず重要なことと考える。教員を目指していない学生にも充実した学科での学び，また大学生活だったといえるよう，教員養成だけではなく，「社会教育」や「生涯学習」等も含めた幅広い「教育」の観点から様々なことを展開できるような人物を育成できるよう，本学教育学科の独自性を発展させることも重要なことであると考える。本学の教育学科には狭い意味での「教育」だけではない専門性の高いスタッフばかりである。本学科の独自性をさらに追求したい。

2020 年は新型コロナウィルス感染症のパンデミックが起こり，日本のみならず世界中で日常生活を見直さなければならない状況が起きた。大学の授業も遠隔授業や対面授業であってもソーシャルディスタンス等を考慮して進めなければならなくなった。2021 年以降も感染症対策を継続させなければならない状況下において，学生への知識提供の質的保障は大学教育において最優先すべきことである。改めて本学科のカリキュラムが円滑に進行するよう学科教員として考えなければならない。また，このような緊急事態が起こっても子ども達が安心して学校生活が送れるような対応ができる強い心と体を持った教員を育成する必要もあると改めて思う。

今後は継時的な学科学生の意識の変容過程についても調査をしてみる必要があるだろう。大学での学びや実習等を通して学生の意識がどのように変化するのかは養成校にとっては重要な情報である。加えて本学科は 2021 年に初めての卒業生を送り出すこととなる。前述したように社会全体が大変な状況にある中で，教育学科初の卒業生がどのような進路選択をするのか，今後の学科のあり方を検討するためにも卒業時の調査が必要と考える。

引用文献

三島知剛・髙旗浩志・後藤大輔・樫田健志・江木英二・曽田佳代子・加賀　勝（2014）　岡山大学教師教育開発センター全学教職課程の質保証に関する研究（2）：学生の平成 24 年度の初年次プログラム前後における意識変容に着目して　岡山大学教師教育開発センター紀要 4, 82-89.

大谷直史・柿内真紀（2013）　鳥取大学における教職志望者の意識　鳥取大学教育研究論集 3, 89-100.

白石淳（2016）「教養」としての教育学を学修する意義―授業実践における学生の視点からの検討―　北海道医療大学看護福祉学部紀要 23, 87-94.

文部科学省　小中一貫した教育課程の編成実施に関わる手引き　2018

学校教育法　第 5 章の 2　義務教育学校　（最終改正：2019）

学校教育法　第 7 章　中等教育学校　（最終改正：2019）

付記

本学科の特徴および学位授与の方針については，東北学院大学文学部教育学科ウェブページを参考にした。

謝辞

今回の調査において，心よく協力してくださった2018年度入学の文学部教育学科の学生に心より感謝申し上げます。みなさんの理解と協力がなければこの調査は成立しませんでした。本当にありがとうございました。

資料　インタビュー内容（抜粋）

	楽しい授業	楽しくない授業	理想の教師像	子どもと接した機会
理由・内容（抜粋）	友だちと受けているから 小人数は楽しい 考える授業は楽しい，新しい発見ができる 自分も参加できるのが楽しい 自分が学びたいことが学べる 好きな科目が学べる アクティブラーニング，同学科生が多いのも良い 教授の教え方おもしろい 教員志望で興味がある勉強だから 自分が参加できる授業は楽しい グループワークは楽しい 専門的な知識を学べる 高校の時よりグループの授業が多くなって人と関わる機会が増えたコミュニケーションをとる授業楽しい 英語が好き 自分のやりたい授業が選択してできる 自分の興味ある分野は楽しい 今まで学んでこなかったことが学べる いろいろな授業があって楽しい 高校までと違い自分の専門分野について自主的に学べる 友達と一緒に受けれるから	しゃべっているだけ 90分はつらい 苦手科目がある 座っている時間が長い 一方的に話を聞くのが苦手 英語が嫌い もう少し専門性が欲しい 内容が難しい やりたかった勉強とは少し違う 英語の授業などついていけない 人数が多い科目 わかりづらい授業 先生との距離が遠い 興味がない 先生の話を聞くだけの授業	信頼される 学級づくりをうまくする 人の話に耳を傾ける 相手の立場になって考える 子ども達をよく見る 生徒を優先 一人一人を気にかける 生徒を一番に考えて行動する 友だちのように生徒との距離が近い 楽しい授業ができる 親が小学校の先生，親がアドバイザー 生徒と仲が良くめりはりのある おもしろいあきさせない授業をする 背中を押してくれる 自分の考えをちゃんと持ってて，外部からの圧力等にも負けないで 子どもたちに教えられる 子どもたちのお手本になれる 周囲が見えて平等に接する 子どもの未来を考えてあげられる 子どもと一緒に成長できる みんなから慕われる 生徒の苦手意識をなくす 道しるべを作ってあげる 生徒とともに一喜一憂できる	ボランティア 従兄弟が小学生なので接する機会がある 塾でバイト 月1でボランティアとして先生の手伝い 中学3年生によさこいを教えている 地域の児童館でピアノ弾いたりイベント手伝ったりした ボランティアで勉強を教える 中学校の時の職場体験等 家庭教師 サークル：子どもと遊ぶ 英会話スクールでのボランティア バイト先のお客さんと接する ボランティアで学習支援 子どもまつりのボランティア 大学のボランティアで学習支援